

『イエス・キリストの恵み』 (要旨)

聖書箇所：I テサロニケ 5:23-28



【1】パウロの祈り

想定を超えた「感染症の猛威」や「一国の政権の崩壊」等により、多くの人々は平和な生活を失い、異常事態に置かれました。私たちはこうした事態が終息し、もとの日常が戻るようにと願い祈ります。

使徒パウロが手紙を書き送ったテサロニケ教会の中にも、平和な生活を送ることが困難になっていた人々がいました。今日明日にでも主イエス・キリストが再び来られる！と待っていたメンバー。彼らは落ち着いた日々を過ごすことができなくなっていました。ある時期を境に「いつの日かの救い」を希求する一方で、足元の生活が見えなくなってしまったのです。

パウロは手紙においてそうした人々を教え励ましました。そして手紙の最後で「平和の神ご自身が、あなたがたを完全に聖なるものとしてくださいますように」(5章23節)と祈りました。すなわち「キリストを信じる者が、神が聖であるように、自らを聖別し、生涯を通じてキリストに似た者とされていくこと」(「聖化」)ができるようにと祈ったのです。

ある人は、イエスキリストを救い主として信じた者すなわち「新生」した者にとって大切なことは「生きること」だと説明しました。

「霊的に生まれて後に大切なことは、生きることである。新生があり、次に生きるべきキリスト者の生活がある。これは聖化の領域であり、それは新生の時から、この現在の生活を通して、イエスの来られるまで、あるいは私たちが死ぬまで続くのである」(F.A.シェファー『真に霊的であること』)

何らかの出来事によって異常事態に置かれ、「いつの日かの救い」を待望する一方で、今日という日を蔑ろにしていることはないか。イエスの来臨を待ち望むということは、それに備えて、ふさわしく、今日という日をキリストとともに「生きる」ということなのです。

【2】パウロの勧め

パウロは「この手紙をすべての兄弟たちに読ん

で聞かせるよう」(5章27節)厳命しました。彼はこの手紙を通じて、苦難の中にある教会を励ましました。聖書が教える夫婦のあり方、不品行から離れること、主イエスの再臨(来臨)についての正しい知識、そして信仰生活のあり方を具体的に記しました(4章-5章)。こうした内容の手紙を教会のメンバーに読んで聞かせるようにと命じたのです。この手紙の朗読者あるいは聴衆の中には、居心地の悪さを感じる人がいたでしょう。自分では止めたい思いながら止めることができない習慣から抜け出せないでいる人。自分たちがこれまで正しいと確信し公に主張して来たことが誤っているのだと正された人。しかしパウロは居心地の悪さを感じる人を排除するためにこの手紙を書いたのではないのです。教会のメンバーが、キリストを信じ受け入れた者すなわち「新生」した者だからこそ、来臨に備えて「生きる」指針を示したのです。なぜ「生きる」指針が必要なのでしょうか。それは私たちにはキリストを信じる前の生活に戻ろうとする肉の性質があるからです。そうした私たちが一致して教会を建て上げるため教えたのです。

【3】パウロの挨拶

パウロの「さようなら」の挨拶は、「私たちの主イエス・キリストの恵みが、あなたがたとともにありますように」(28節)でした。「恵みと平安」(1章1節)を祈る挨拶で始まった手紙は「恵み」(5章28節)で終わります。ここにパウロの基本的な姿勢があらわれています。

パウロはキリスト者を「完全に聖なるもの」とするのは、神のなさることだと確信していました。彼は首尾一貫してキリストの恵みに信頼しました。そのため祈りました。そして自分たちのためにも祈ってほしいと懇願したのです。

私たちはそれぞれ切実な課題を抱え、「いつの日かの救い」や課題の解決を待ち望み切に祈ります。けれども「いつの日かの救い」は今日と切り離された将来のことではないのです。今日というこの日にキリストの「恵み」が与えられるのです。